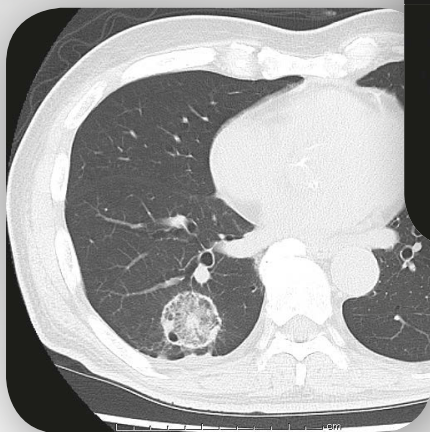
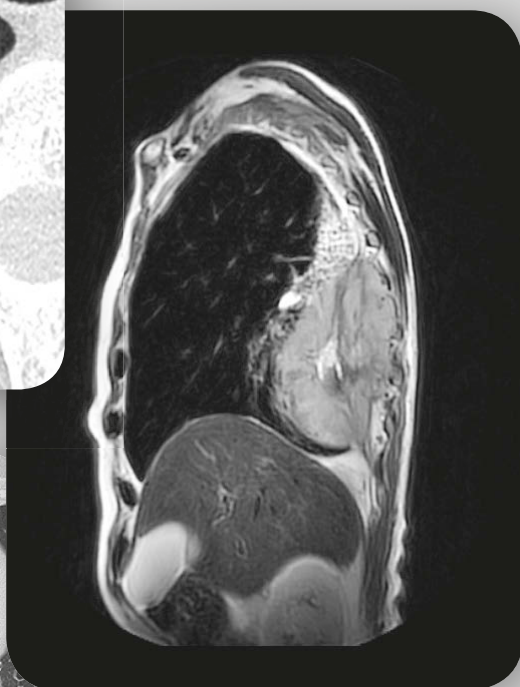
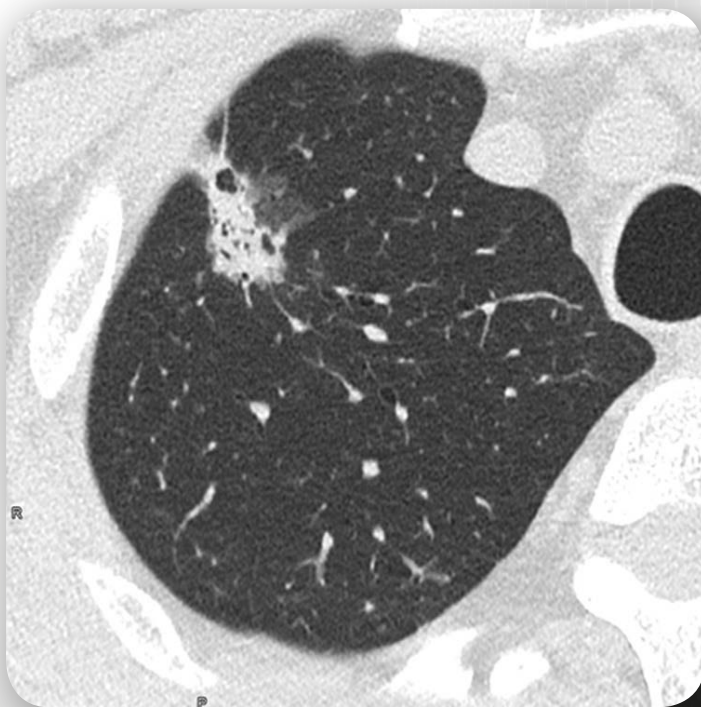


特 集

肺癌：診断と治療



(写真：p1408, 1415, 1450より)

の実際 2018

序説

肺癌は依然わが国における悪性新生物による死因の第1位であり、その診断・治療の重要性については以前より強調されてきたところである。

この領域に関しても医学の進歩はすさまじく、今回は2018年現在における診断から治療までを幅広く取り上げ特集を組むこととした。特に、読影の裏付けとなる「病理の最新情報」と「画像診断の実際」には多くのページを割くことにより特徴をもたせた。また、「肺癌取扱い規約改訂のポイント」と、「検診の実際」についても別項を設け、日常診療におけるレポート作成の大きな一助とした。

本来的に画像における読影の質を高めるためには、治療を前提とした診断が不可欠である。「内科」「IVR」「外科」「放射線」といった治療各分野においてもessential minimumにつき述べていただいた。

著者の選定に際しては、筆者が今まで日本医科大学、坪井病院、栃木県立がんセンターなどでお世話になったそれぞれの領域のトップランナーをお願いした。当初はあまりに欲張りすぎた依頼になったかと危惧したが、いただいた原稿はいずれもわかりやすく、かつホットな内容であふれている。

本特集が、肺癌診療に携わるすべての医療関係者のお役に立つことを願ってやまない。

田島廣之